

体験！伝統文化

其の十三
令和2年3月26日発行



本梅小学校は、学校教育目標「仲よくはげみ 強くはばたく 児童の育成」をもとにした教育活動を推進しています。

とりわけ、国語科教育を重点研究に位置づけて、「書くこと」、「話すこと」を中心とした言語活動を授業に取り入れるとともに、主体的・対話的で深い学びが実現できるよう、自分の考えを進んで表現する児童の育成を目指しています。

そこで、京都府の「文化を未来に伝える次世代育み事業『学校・アート・出会いプロジェクト』」を活用し、5年生11名の児童が、落語家 桂米二 さんから手ほどきを受け、古典芸能の一つ、落語に取り組みました。扇子を使ったうどんの食べ方や、観客を笑わせる間の取り方、上手（かみて）と下手（しもて）を意識して複数の役を演じ分ける話し方など、言葉で表現する力と落語における所作や仕草について、6月から練習を重ねてきました。

1月28日（火）、本梅小学校体育館で「本梅子ども寄席」と題して発表会が開かれ、古典落語の3演目を披露しました。



落語

落語は、着物を着た一人の噺家（はなしか）が座布団に座ったままで複数の登場人物を演じ分ける芸能です。しかも、小道具は扇子と手ぬぐいの2つのみ。「何か地味…」と思われるかもしれませんが、そんなことはありません。噺家の洗練された仕草や目線、さらに、観客の想像力が加わることによって、落語の世界は無限に広がります。落語は、噺家と観客が一緒になって作り上げるものです。

「マクラ」って何？

落語を堪能してもらうためには、観客を噺の世界に引き込むことが不可欠です。そのため、舞台に出てきた噺家は、まずは世間話や小咄（こぼなし）など軽い話で観客の気持ちを解きほぐします。これを「マクラをふる」といいます。マクラをふって観客の気持ちが和らいだところで、噺家は本題に入ります。そうして、本題の最後は、洒落（しゃれ）やウィットに富んだ言葉「オチ」で締めくくります。

文化庁広報誌「ぶんかる」より 抜粋



当日本番前の通し稽古で、桂米二さんから児童たちに対して、「しっかり顔を上げて演じるように。表情は豊かな方がいいけど、大まじめに演じた方が面白い。」と助言されていました。

いよいよ本番の「本梅子ども寄席」です。5年生の児童が取り組んだ古典落語は『動物園』『道具屋』『時うどん』の3演目で、それぞれをリレー形式で発表しました。体育館は観客の児童や保護者の笑い声であふれていました。演目の間には、くすりと笑える小噺（こばなし）も披露しました。

児童の感想



練習の時は、大きな声や細々とした動作ができていたけれど、たくさんの人前でできるか心配でした。
本番も気をつけながらうまくできたし、楽しんでできました。

師匠に古典落語の台本を覚えてただけでは発表することはできないと教えていただきました。
登場する人物を表現するのは簡単ではありませんでした。とても難しかったけれど楽しさも分かりました。

台本を夏休み中に覚えてきなさいと言われたときには心配でしたが、やってみると全部覚えられました。
本番もまちがわずにできてホッとしています。

落語をすると決まったときはすごく楽しみでしたが、台本を少し覚えたころにはずかしさが出てきました。
仕草の練習をたくさんやっとうまくなってくると、また楽しくなってきたので、小噺を自分からやりたいと言えるようになりました。



簡単だと思っていたけれどやってみると難しいことが分かりました。
2学期からはみんなと楽しんで練習できるようになりました。

最初はできるかどうか分かりませんが、練習していくうちに、人を笑わせる楽しさを感じることができるようになりました。

初めは落語をやりたい気持ちになかったけれど、夏からずっと練習してきて、落語の楽しいところや難しいところがわかりました。
師匠から習ったことを、人の前で話すときに気をつけていきたいです。

一番に発表するのでとても緊張しましたが、師匠から言われたうどんを食べる時の動作が練習の時よりうまくできたし、楽しくできたと思います。



南丹教育局管内の小学校・中学校・義務教育学校における伝統文化に関する取組を、「体験！伝統文化」として南丹教育局ホームページに掲載しています。

南丹教育局ホームページ
<http://www.kyoto-be.ne.jp/nantan-k/cms/>
南丹教育局 検索

